

ハワイ語における名詞句と動詞句の区分に関わる曖昧性について

その他（別言語等） のタイトル	Ambiguity concerning the Distinction between Noun Phrases and Verb Phrases in Hawaiian
著者	塩谷 亨
雑誌名	北海道言語文化研究
号	18
ページ	91-109
発行年	2020
URL	http://hdl.handle.net/10258/00010261

ハワイ語における名詞句と動詞句の区分に関わる曖昧性について*

塩谷 亨

Ambiguity concerning the Distinction between Noun Phrases and Verb Phrases in Hawaiian

Toru SHIONOYA

要旨: ハワイ語では同じ形態で動詞としても名詞としても用いることができる語が大多数を占めている。ほとんどの後接語は名詞句に付加されるものと動詞句に付加されるものと分かれており、後接語の種類によりその句が名詞句と動詞句のどちらとして機能しているか判別することができる。しかしながら、後接語 **he** については名詞句にも動詞句にも付加されるため、**he** が導く節については、見かけ上全く同じ構造に見えるにもかかわらず、あるものは名詞句だが、あるものは動詞句であるという状況が存在する。また、**he** が導く句の大部分において、**he** の導く句は主語名詞句が指すものの「属性」を表しているというように意味的にも類似している。本稿では、**he** が導く名詞句と動詞句の構造と意味を比較したうえで、どのような場合に名詞句か動詞句かの区別について曖昧性が生じるのか論じた。

キーワード: ポリネシア諸語 ハワイ語 後接語 属性の記述 品詞

1. 序論

1.1. 本稿の目的

ハワイ語の大多数の単語については、単語に付加される後接語の種類により、その単語が動詞的に用いられているか、名詞的に用いられているかその機能が示される。しかしながら、最もよく使われる後接語の一つである **he** は動詞句にも名詞句にも付加されるという特殊な振る舞いをする。本稿では、**he** の導く句が、どのような場合に名詞句或いは動詞句として分析されるのか比較したうえで、名詞句と動詞句の区別に曖昧性が生じる状況について考察する。

1.2. ハワイ語の文・句の構造及び語類の概観

本稿の分析対象となるハワイ語はポリネシア諸語の一つであり、ハワイ諸島の固有の言語

である。今回参考データとして利用するタヒチ語及びサモア語も同じくポリネシア諸語に属する同系言語であるが、タヒチ語はハワイ語と同じく東部ポリネシア諸語という下位分類に属し、より近い関係にある。

まず、ハワイ語の基本的な文構造を概観する。文の基本語順は<述語-主語-その他>で、修飾語は後置される言語である。述語以外の要素は義務的ではなく文脈から明白な場合にはしばしば省略される。また、述語には動詞述語と名詞述語¹の2種類がある。

- (1) ... [述語 ua ho‘oikaika nui] [主語 ‘o ia] [その他 ma kēia hana]....

PF work hard much he at this work²

「彼はこの仕事で大いに頑張った。」 Fornander (1918-1919:543)

- (2) [述語 Ma kona ‘ike kilokilo] [主語 keia ‘ōlelo.]

at his knowledge seer this word

「この言葉は彼の預言者の知識に（よるもので）ある」 Fornander (1916-1917:503)

例文(1)は動詞述語文、(2)は名詞述語文の例である。また、例文(1)の述語動詞句では動詞 ho‘oikaika「頑張る」に修飾語 nui「大いに」が、例文(2)の述語名詞句では名詞‘ike「知識」に修飾語 kilokilo「預言者」が、それぞれ後置されている。

文は動詞句と名詞句の組み合わせから成るが、それぞれの名詞句及び動詞句の構造は(3)のように図示される³。

- (3) (後接語)+名詞/動詞+(修飾語)+(前接語)

一部の例外を除き、中核の名詞/動詞は必須要素であり、その他の要素は義務的ではない。修飾語の位置に来るのは他の名詞/動詞である。また、後接語、修飾語、前接語は二つ以上付加される場合もある。

ハワイ語においては、名詞と動詞という品詞の区分は排他的なものではなく、派生語を除き、単語そのものに動詞として機能するか名詞として機能するかの目印となるような形態的な要素等はない。実際、動詞に属する単語のほとんどは名詞的にも用いることができる。例えば、make という単語は「死ぬ」という意味で動詞的に用いることもできるが(例(4))、「死」という意味で名詞的に用いることもできる(例(5))。

- (4) Ua make anei ‘oe?

PF die QU you

「あなたは死んだのか。」 Beckwith (1997:551)

- (5)a lohe i ka make o Kahekili....

when hear AC the death of K.

「Kahekili の死のことを聞いた時」 Fornander (1918-1919:693)

一方で、むしろ稀な事例ではあるが、通常は名詞として分類される単語が、場合によっては動詞的に用いられるということもある。例えば、最も頻繁には「人」という名詞的な意味(例(6))で用いられる *kanaka* という単語が、動詞的に用いられる(例(7))ことがある。

(6)e hā'awi mai 'oe i kekahi kanaka na'u.

CM give DR you AC some person for me

「誰か一人私にください。」Fornander (1916-1917:693)

(7)a hiki i ka iwakālua, ua kanaka makua ia.

when reach to the 20 PF person mature he

「....20 に到達したとき、彼は大人になった。」Kamehameha III (1994:18)

例文(7)では、通常は名詞として用いられる単語 *kanaka* 「人」の後ろに修飾語 *makua* 「成熟した」が付加されて「大人」という意味の複合名詞を成している。その前に完了の *ua* が付加されて全体として動詞句的に用いられている。

単語そのものには動詞として機能するか名詞として機能するかの目印となるような形態的な要素等はない代わりに、多くの場合、その単語に付加される後接語の種類により、その単語が動詞的に用いられているか、名詞的に用いられているかその機能が示される。後接語は以下の様に二つの下位グループに分けられる。

(8) i) 動詞後接語：時制・相指標(tense aspect marker)

ii) 名詞後接語：前置詞、限定詞、指小詞、複数指標

後接語のうち、時制・相指標(tense aspect marker)が付加された場合には⁴、その句は動詞句として機能している。一方、前置詞、限定詞、指小詞、複数指標が付加された場合には、その句は名詞句として機能している。例えば、上記で対比した二つの単語 *make*、*kanaka* について、例(4)と例(7)では、時制・相指標の *ua*(完了を表す)が付加されているので動詞句として機能していることが示され、例(5)と(6)では、前置詞 *i* と限定詞（ここでは定冠詞 *ka*）が付加されているので名詞句として機能していることが示されている。その一方で、前接語については、受動態指標と動名詞指標（いずれも動詞的に用いられている語に付加される）を除いて、ほとんどが、名詞句にも動詞句にも付加される副詞的なものであり、名詞句か動詞句かの目印としての機能はない。

尚、日本語や英語で見られる形容詞類という範疇は、ハワイ語などのポリネシア諸語の多くでは独立した語類としては設定せず、動詞類の下位範疇とされ、状態動詞と呼ばれる。例(4)と(5)で見た *make* 「死ぬ」は状態動詞という語類に属する。それに対して、例(1)の *ho'oikaika* 「頑張る」、例(5)の *lohe*、例(6)の *hā'awi* 「与える」は行為動詞という動詞類の下位範疇に属する。行為動詞には、更に、目的語を取る他動詞と、目的語を取らない自動詞がある。

1.3. 後接語 he の概略と先行研究のまとめ

今回扱う he は後接語の一つである。後接語 he は従来、不定冠詞とみなされていたが、その後様々な分析がなされてきたものである。

この he は後ろに名詞（例(9)の holoholona「動物」）が付加されて述語名詞句を作るのに加えて、後ろに名詞ではなく状態動詞（例(10)の ono「おいしい」）や行為動詞（例(11)の ho‘olohe「聞く」）が来て述語動詞句を作ることもある。前節で述べたように、他の前接語は動詞句を作るものと名詞句を作るものに明確に分かれている。その意味で、この he は特殊な分布を持つ後接語ということになる。

(9) He holoholona laka ka pipi.

? animal domesticated the cattle

「牛は家畜化された動物だ。」 Mookini (1985:55)

(10) He ono loa kona ‘i‘o....

? delicious very its meat

「その肉はとてもおいしい。」 Mookini (1985:55)

(11) he ho‘olohe ka makani iā ia...

? listen the wind AC her

「...風は彼女の言うことを聞く...」 (Fornander 1918-1919:73)

上記の例文(9)が最も頻繁に用いられる he の用法であるが、英語の不定冠詞 a/an の用法に対応しており、また、同系の他のポリネシア諸語の不定冠詞と対応することもあり⁵、長い間不定冠詞として分析されてきた。しかしながら、定冠詞を含む他の限定詞と振る舞いがかなり異なっており、特に、例文(10)、(11)のように状態動詞や行為動詞との共起をどう扱うかについて、これまで様々な分析が提案されてきた。

Elbert and Pukui (1979)は、he を定冠詞とは異なる特殊な分布を持つ不定冠詞と分析した上で、he の後ろの来るものは、語類に限らず全て名詞とみなされるとした。しかしながら、例えば、例文(10)の状態動詞 ono「おいしい」の名詞としての意味は本来「おいしさ」であり、例文(11)の行為動詞 ho‘olohe「聞く」の名詞としての意味は本来「聞くこと」である。従って、この分析によると、(10)は「その肉はおいしさだ」「風は聞くことだ」のようになるはずであり、矛盾を生じる。

その解決策の一つとして、he の後ろに名詞 mea「もの/物/者」が省略されているという分析が提案された。Kamana and Wilson (1977)、Cook (1999)は様々な状況で mea は省略されると指摘している。これによると、上記の(10)と(11)は以下の様に分析される。(以下、(12)と(13)として、(10)と(11)に Cook らの分析を適用した場合にどのようなようになるかを提示する。)

(12) =(10)He (mea) ono loa kona ‘i‘o....

? thing delicious very its meat 「その肉はとてもおいしい(ものだ)。」

(13) =(11).... he (mea) ho‘olohe ka makani iā ia....

? thing listen the wind AC her 「...風は彼女の言うことを聞く(者だ)....」

上記の(12)については、さほど問題はないが、(13)については構造的にぎこちない部分がある。mea があると、前半部分は「風は聞くものである」という名詞述語文になるが、その場合、末尾の目的語名詞句 iā ia「彼女を」の扱いが問題となる。目的語名詞句は動詞述語文において<述語—主語—目的語>のように現われるものであり、そもそも名詞述語文には目的語はない。従って、元々の目的語名詞句であったものが宙に浮いた形になる。一つの可能性として、mea「もの」が「彼女の言うことを聞く」という意味の関係節により修飾されていて、結果として「風は彼女の言うことを聞く者だ」という意味となるとする分析が考えられる。しかしながら、その分析だと、関係節が途中で名詞述語文全体の主語である ka makani「風」により分断されていることになる。「彼女の言うことを聞く風」のように関係節を用いて表す場合、通常は、mea ho‘olohe iā ia「彼女の言うことを聞く者」のように目的語と一体として関係節を成すはずである。また、たまたま、上記の(12)ではうまく行ったが、[mea+動詞]は必ずしも「~であるもの/~するもの」という意味になるわけではない。例えば、Carter (1996)が引用しているこの見えない mea による分析例として次のようなものがある。

(14) He (mea) ‘ai ‘o ia i ka palaoa.

? thing eat he AC the bread

「彼はパンを食べる。」 Carter (1996:39)

この分析によると、この文は「彼はパンを食べる(者である)。」と分析される。しかしながら、実際には、行為動詞‘ai は動詞としての意味は「食べる」であるが、それが mea に付加された mea ‘ai は通常は「食べる者」ではなく「食べ物=食べるためのもの」という意味で用いられる(例文(15))。

(15) He mea ‘ai nā kalo moa.

? thing eat PL taro baked

「焼いたタロイモは食べ物である」 Fornander (1919-1920:396)

[mea+動詞]は単に「動詞が表す状態・行為に関連があるもの」という意味であり、いつもいつも、「~であるもの/~するもの」という意味になる訳ではないということから、mea が挿入されると結果として意味に曖昧性が生じてしまう。しかしながら、元々の mea がない文(例(14)で言えば He ‘ai ‘o ia i ka palaoa)にはそのような曖昧性はなく、主語と目的語が明確に示された他動詞述語文(例(14)で言えば「彼はパンを食べる」)である。このようなことから、見えない mea が省略されているという分析には問題がある。

このような、見えない mea が省略されているとする分析に対する対案として、Carter (1996)

が **he** をコピュラ動詞という全く新しい範疇として分析することを提案した。コピュラ動詞自体が例外的な範疇であるため、様々な **he** の例外的な振る舞いは全て **he** 特有の性質として説明できる。これに対して、Cook (1999)はコピュラ動詞のような例外的な範疇を新しく設定しなくても、**he** に関連していくつかの特別規則を設けることで十分対応できるとして、上述の见えない **mea** が省略されているという分析に回帰している。又、そもそも、コピュラ動詞がなぜ必要なのか、どのような意味機能を担っているのかも明確ではない。

このように分析が二転三転した理由は、**he** の持つ機能である述語名詞句に付く指標と述語動詞句に付く指標という二つの異質なものを一つの機能として説明しようとした点にある。Shionoya (2009)では、**he** の機能を明確に二つに分けるということを提案した⁶。すなわち、名詞句を導く **he** については前置詞(具体的には前置詞‘o (neutral case marker⁷))の機能と不定冠詞の機能が統合された **he**₁、動詞句を導く **he** については属性を表す時制・相指標の **he**₂、の二つの機能とした。名詞句を導く **he** の機能と動詞句を導く **he** の機能を分離することにより、コピュラ動詞のような特殊な範疇を設定したり、見えない名詞 **mea** の存在を想定したり、**he** のみに適用される特別ルールを設定することもなく、無理のない分析を提示することができた⁸。本稿では Shionoya (2009)の分析を採用する。それによれば、上掲の例文(9)-(11)は以下の様に分析される。

(16) =(9) **He** holoholona laka ka pipi.

NC-ID animal domesticated the cattle

「牛は家畜化された動物だ。」 Mookini (1985:55)

(17) =(10)**He** ono loa kona ‘i‘o....

AT delicious very its meat

「その肉はとてもおいしい。」 Mookini (1985:55)

(18) =(11).... **He** ho‘olohe ka makani iā ia....

AT listen the wind AC her

「...風は彼女の言うことを聞く...」 Fornander (1918-1919:73)

例(16)で名詞述語を導く **he** は前置詞(neutral case marker)と不定冠詞の機能が統合されたもの、例(17)と(18)で動詞述語を導く **he** は属性(attribute)を表す時制・相指標(tense aspect marker)となる。

1.4. 本稿の構成

既に述べたように、後接語 **he** には名詞句に付加される後接語と動詞句に付加される後接語の二つの異なる機能がある。ほとんどの単語が名詞と動詞の両方として用いることができるハワイ語において、(8)でも示したように、ある一つの句が名詞句として機能しているか動詞句として機能しているかは付加されている後接語の種類により明示される。しかしながら、**he** に二種類あるということは、**he** の導く句については、名詞句か動詞句かの目印が欠落して

いることになり、文の構造や文脈から判断されることになる。

本稿では、**he** の導く句が、どのような場合に名詞句或いは動詞句として分析されるのか、両者の間にどんな違いがあるのか、比較したうえで、名詞句と動詞句どちらとして機能しているのか曖昧であり、区別に悩むような事例を提示し、どのような場合に曖昧性が生じるのか考察する。それに基づき、**he** の持つ二つの機能の関係について論じる。

第2節では、**he** の様々な用法について、**he** が名詞に付加される場合（2.1節）と、**he** が動詞に付加される場合（2.2節）に分けて、**he** が付加された句がどのような構造の文でそれぞれどのような意味を表しているのか記述する。第3節では、**he** が導く句が名詞句であるか動詞句であるかの区別の曖昧性について考察する。まず、第2節で示された様々な文の構造を整理し（3.1節）、主語に完全な名詞句が来る場合（3.2節）と主語が所有形のみの場合（3.3節）に分けて論じる。最後に、第4節で、名詞句を導く **he** と動詞句の導く **he** の関係について論じ（4.1節）、名詞句と動詞句の区別に見られた曖昧性が示唆することについて考察した（4.2節）。

2. **he** の様々な用法とその表す意味

2.1. [**he**+名詞]

2.1.1. 「A は B である」

ハワイ語においては 19 世紀終わりから急激に母語話者人口が減少し、現在聞き取り調査が困難である事情もあり、分析データとしては、文字データを用いる。ハワイ語においては、ローマンアルファベットを利用した文字システムが 19 世紀に考案され、それ以降、聖書、法律、学校教材、小説、伝統文化の記録等の各種出版物、更には新聞の発行もなされ、文字言語が確立した言語であり豊富な文字言語データの蓄積がある。今回の分析に用いたデータのジャンルとしては、伝統習慣 (Beckwith (2007)、Malo (1987))、伝承伝説 (Fornander (1916-1917)、Fornander (1918-1919)、Fornander (1919-1920))、新聞 (Ka Nupepa Kuokoa)、法律 (Kamehameha III (1994))、物語 (Beckwith (1997)、Nakuina (1991))、解説 (Mookini (1985)) などできるだけ多様なデータを利用した。以下、それぞれの例文には出典（ページ数含む）を示す。新聞から引用した例文については新聞名（年/月/日:頁）のように示す。

最も頻繁に見られる用法は「A は B である」という意味の文の述語を成す場合である。

(19) He ali'i 'o Pineaikalani, ko kupunakāne....

NC-ID chief PR P... your grandfather

「君の祖父、Pineaikalani は貴族だ...」 Fornander (1916-1917:373)

(20) =(2)He holoholona laka ka pipi.

NC-ID animal domesticated the cattle

「牛は家畜化された動物だ。」 Mookini (1985:55)

このような文は類包含(class inclusion)文と呼ばれてきたものである (Schütz, Kanada and Cook

(2005:36))。例文(19)では主語名詞句‘o Pineaikalani が he の導く名詞句 he ali‘i が表す「貴族」という類の中に属するという意味を、例文(20)では、主語名詞句 ka pipi 「牛」が he が導く名詞節 he holoholona laka が表す「家畜化された動物」という類の中に属するという意味を、それぞれ表している。二つの例文の違いは、名詞の後ろの修飾語の有無である。例文(20)では、名詞 holoholona 「動物」の後ろに laka 「家畜化された」が付加されている。このような類包含文の構造及び意味は以下の様にまとめられる。

- (21) (類包含文) [述語 NP he N₁][主語 NP NP₂]「NP₂は N₁ (という類に属するもの) である」

2.1.2. 「A は B を持っている」

もう一つの用法は「A は B を持っている」という所有の意味を表す所有文を成す場合である。所有文でも、類包含文と同様に述語名詞句は[he+N]であるが、主語名詞句は所有形のみから成る。ハワイ語には所有形が3系統あるが、所有文で用いられるのは、そのうち、[kō/kā +NP]という形式を持つものである。kō と kā の選択はおおまかには所有権の制御の有無により決まり、例えば、子供のように所有権を制御できる(子供は養子として移譲可能)場合(例(22))には kā を、自分の身体部位の様に所有権を制御できない場合(例(23))には kō を用いる。NP に当たる部分が単数人称代名詞の場合には短縮形が用いられる。例えば、1人称単数代名詞は au であるが、kā+au は ka‘u という短縮形が用いられる(例(22))。

- (22) ‘Ae... he keiki ka‘u.
Yes NC-ID child my
「はい...私には子供がいます。」 Fornander (1916-1917:551)
- (23) He lehelehe lō‘ihi kō ka laehaokela....
NC-ID lip long PO the rhinoceros
「サイは長い唇を持っている;...」 Mookini (1985:11)

例文(22)と(23)はそれぞれ直訳すると「私のは子供です」、「サイのは長い唇である」となる。すなわち、「私」の所有するものは「子供」という類の中に属する、「サイ」の所有するものは「長い唇」という類の中に属するという意味をそれぞれ表している。[kō/kā +NP]の所有形及びその短縮形については、後ろに名詞を伴わず単独で「~の(もの)」として一つの名詞句を形成することができる⁹。

- (24) (所有文) [述語 NP he N₁][主語 NP kō/kā-NP₂]「NP₂は N₁ (という類に属するもの) を持つ」
(lit. NP₂ のは N₁ だ。)

主語名詞句の中核となる名詞が省かれているという点以外は前述の類包含文と構造的にも意

味的にも同様と言える。

2.1.3. 文中で用いられる場合

上述の事例はいずれも[he+N]が文頭で述語名詞句として用いられる場合であった。頻度も低く、用いられる場合も限定的ではあるものの、[he+N]が文頭の述語名詞句ではなく、文中にて用いられることがある。述語動詞句の主語名詞句として用いられる場合（例(25)）と目的語名詞句として用いられる場合（例(26)）がある。

- (25) a loa‘a iā ia he kaulua¹⁰....
and be obtained to him NC-ID double hull canoe
「...そして、彼は双胴カヌーを得た」(lit.彼に双胴カヌーが得られた)
Beckwith (1997:545)

- (26) a hānau he keiki kane¹¹....
and give birth NC-ID boy
「...そして男子を産んだ...」 Fornander (1916-1917:451)

いずれも、[he+N]が表すのは初出のもの（場面に初めて登場する事物）であり、不定(indefinite)の名詞句である。この用法は英語の不定冠詞の用法に対応する部分である。意味としては、例文（25）は「双胴カヌーという類の中に属するものが得られた」、例文（26）は「男子という類に属するものを産んだ」という意味だと分析できる。文中の[he+N]については以下のようにならめられる。

- (27) （動詞の不定の主語/目的語）[_{NP} he N] 「N（という類に属するもの）が/を」

2.1.4. he が付加される名詞について補足

上記の図式化においては、he が付加されるのは N「名詞」であり、NP「名詞句」ではないとして表示している。N はここでは、前置詞/限定詞が付いていない名詞を指している。これが意味するところは、he と名詞の間には、前置詞・限定詞は現れないが、他の後接語は現れることができるということである¹²。例えば、he と名詞の間には複数指標 mau、指小詞 wahi 等が来ることができる。

- (28) He mau lā makani kekahi....
NC-ID PL day wind some
「風の日もある」(lit.いくつかは風の日である) Beckwith (2007:99)

- (29) He wahi akua malimali ‘o Hanaaumoe.
NC-ID PC good flatter PR H....
「Hanaaumoe は人に媚びるちょっとした神である。」 Fornander (1916-1917:477)

尚、複数指標 *mau*、指小詞 *wahi* は名詞句特有の要素であり、動詞句には用いられない。すなわち、それらは *he* と名詞の間に現れるものであり、後述する[*he*+動詞]においては現れない。

2.2. [*he*+動詞]

2.2.1. [*he* 状態動詞] (動詞述語文)

名詞句を導く *he* と比べて動詞句を導く *he* の頻度は全体的にかなり落ちるが、その中でも、[*he* 状態動詞]はかなりの頻度で見られる。主語名詞句が指すものの性質や特徴を表す文で用いられる。

- (30) *he keokeo kō lākou mau lālā, he nunui ka lau.*
 AT white PO they PL branch AT big the leaf
 「..., それらの枝は白く、葉は大きい。」 Fornander (1918-1919:609)
- (31) *He lohi ka hoki....*
 AT slow the mule
 「ラバはのろい。」 Mookini (1985:39)

これらの文の構造は以下の様にまとめられる。

- (32) (性質・特徴) [_{述語} VP *he* Vs][_{主語} NP NP][その他] 「NP は Vs だ」

2.2.2. [*he* 行為動詞] (動詞述語文)

頻度は高くないものの、[*he* 行為動詞]が述語となる事例もある。自動詞が用いられる場合(例文(33)、(34))と他動詞が用いられる場合(例文(35)、(36))がある。主に、主語が指すものの習慣や習性の行為を表す文で用いられる。

- (33) *he hele wale nō ka uhane....*
 AT wander just indeed the spirit
 「...靈魂はたださまよい....」 Fornander (1917-1918:577)
- (34) *he noho ke kanaka maluna a holo....*
 AT sit the person on and move
 「人は(馬の)上に座り、移動する...」 Malo (1987:30)
- (35)*he ho‘olohe ka makani iā ia....*
 AT listen the wind AC her
 「...風は彼女の言うことを聞く....」 Fornander (1918-1919:73)
- (36) *he lawe no laua i ke kanaka ma ko laua kua....*
 AT take indeed they AC the person at PO they back
 「それら(=ラバとロバ)はそれらの背で人を運ぶ」 Malo (1987:30)

これらの文の構造は、自動詞と他動詞に分けて以下の様にまとめられる。

- (37) (習慣・習性) [述語 VP he Vi][主語 NP NP][その他]
「NP は Vi(行為動詞/自動詞)する」
- (38) (習慣・習性) [述語 VP he Vt][主語 NP NP1][目的語 NP NP2]
「NP1 は NP2 を Vt(行為動詞/他動詞)する」

2.2.3. [he 動詞 受動態指標‘ia] (動詞述語文)

he は受動態の動詞とも共起する。受動態は動詞の後ろに前接語の一つである受動態指標‘ia を付加することで形成される。これも、主語名詞句が指すものの習慣・習性等を表す文で用いられる。

- (39) He ho‘onoho ‘ia ka holua i ka pōhaku me ka lepo....
AT set PA the sled at the rock with the dirt
「そりは岩と土の所に置かれる。」 Malo (1987:147)
- (40) He makemake nui ‘ia kēia wahi manu....
AT want much PA this PC bird
「このちょっとした鳥は大いに好まれている。」 Ka Nupepa Kuokoa (1863/6/13:1)

これらの文の構造は以下のようにまとめられる。

- (41) (習慣・習性) [述語 VP he Vt ‘ia][主語 NP NP] 「NP は Vt(行為動詞/他動詞)される」

2.2.4. 述語部分に状態動詞・行為動詞が用いられる所有文

所有文について 2.2.1.節で述べたが、その所有文で、he の後ろに動詞が用いられる場合もある。状態動詞の場合には、主に、主語名詞句が指すものの性質・特徴を表す文で用いられる。尚、所有文は「X は Y (という事物) を持つ/所有する」という意味を表すものであり、Y にあたる部分は名詞相当語句 (状態動詞であれば「~さ(英語:~ness)」、行為動詞であれば「~すること(英語:~ing)」のように名詞として機能する) となり、全体としても、名詞述語文として分析される。

- (42) He ‘awa‘awa ho‘i ko ke kai....
NC-ID bitter indeed PO the seawater
「海水は苦いものだ...」 (lit.海水は苦さを持つ) Fornander (1916-1917:395)

例文(42)で、状態動詞‘awa‘awa「苦い」の名詞としての意味は「苦さ」であり、文字通りには海水は苦さを持つ」という意味になるが、そこから、「海水は苦いものだ」という意味が得

られる。この文の構造は次の様にまとめられる。

- (43) [述語 NP he N(<Vs)][主語 NP kō/kā -NP] 「NP は Vs さ (という性質・特徴) を持つ」

同様に、行為動詞も所有文で用いられる。表す意味は多様だが、しばしば経験や選択肢等を表す文で用いられる。行為動詞の後ろに強調詞(wale、nō 等)が複数置かれることが多い。

- (44) he lohe wale nō kona.

NC-ID hear just indeed his

「彼は聞いたことがあっただけだ。」(lit.彼は聞くことを持つ)

Fornander (1916-1917:333)

- (45) he ‘ae wale nō kā ke keiki.

NC-ID agree just indeed PO the child

「子は同意するだけだった。」(lit.子は同意することを持つ) Fornander (1916-1917:99)

いずれも、直訳は「~することを持つ」であるが、(44)では「聞いたことがあった」という経験、(45)は「ただ同意するだけ」という選択肢を表す文で用いられている。これらの文の構造は次のようにまとめられる。

- (46) [述語 NP he N(<Vi/Vt)][主語 NP kō/kā -NP₂]

「NP は~すること (という経験・選択肢) を持つ」

3. he が導く句についての曖昧性

3.1. he が導く句が名詞句か動詞句か

he が導く句が名詞句として用いられている場合と動詞句として用いられている場合の違いについてまとめる。前節で提示した様々な文のパターンについて、文の形式で整理すると、次の二つにまとめられる。

- (47) i) [he V/N] [NP] ... 名詞述語文(類包含文)、動詞文(状態動詞文、行為動詞文)
ii) [he N] [kō/kā -NP] ... 名詞述語文(所有文))

上記のうち、i)については、そもそも、名詞述語文の場合と動詞述語文の場合で構造的に全く違いがない、すなわち、見ただけではどちらかわからないという曖昧性が生じる。一方で、ii)は所有文の構造であり、2.2.4.節でも述べた様に、所有文は「([he N]が指す)事物を NP が持つ/所有する」という意味を表す。従って、所有される事物を指す部分である[he N]には動詞ではなく名詞相当語句が必要となり、全て名詞述語文と分析される。とすると、ii)については名詞句と動詞句の曖昧性は存在しないことになる。しかしながら、3.3. 節で見るように、

一見所有文と同じ構造だが、実際には動詞述語文[he V] [kō/kā-NP]であるような紛らわしい事例が存在するため、結果として、i)と同様の曖昧性が生じる。以下、i)とii)に分けてそれぞれの曖昧性について考察する。

3.2. [he V/N] [NP]

この場合には、見かけ上全く違いがないにもかかわらず、あるものが述語名詞句(例(48))、あるものが述語動詞句(例(49))となる場合である。

- (48) [述語 NP He ali'i] [主語 NP 'o Pineaikalani]....
NC-ID chief PR P....
「Pineaikalani は貴族だ...」(Fornander 1916-1917:373)

- (49) [述語 VP he akamai] [主語 NP 'o Kahiko]
AT smart PR K...
「...Kahiko は賢い。」Malo (1987:159)

いずれも構造は[he V/N 'o 人名]で全く一致しているが、he が導く句については、(48)では名詞句(49)では動詞句である。両者の違いは he の後ろに来る単語のみであり、前述の様に単語自体には名詞や動詞の機能の目印はない。従って、区別は専ら意味でなされる。(48)では「Pineaikalani が貴族という類に属する」というように類包含文の意味関係が成立しているのに対し、(49)は「Kahiko は賢しこさという類に属する」のではなく（Kahiko は人間であり「賢さ」という抽象概念の下位分類にはなり得ない）、「Kahiko は賢い（という性質である）」という動詞文の意味関係となっている。

(50) [he V/N] [NP]の意味による区分

- [he N] [NP]X は Y という類に属する ...名詞述語文（類包含文）
[he V] [NP]X は Y という性質・特徴である ...動詞述語文

例文(49)は状態動詞の例であったが、行為動詞も同様である。例えば、例(33)は「靈魂はさまよう（という性質である）」という意味であり、「靈魂はさまようことという類に属する」という意味ではない（「靈魂」は「さまよう」という行為の下位分類ではない）。

前接語の多くは名詞句か動詞句かの目印にならないが、受動態指標は専ら動詞に付加されるものである。従って、例文(39)、(40)のように受動態指標が付く場合にはそれが目印となり、一目で動詞句であることがわかる。また、例文(35)、(36)のような他動詞文では、目的語名詞句も動詞句の目印にはなり得るが、ハワイ語では、対格の前置詞と与格や場所格の前置詞が同じ形式 i であるため、目的語名詞句と他の斜格名詞句と区別がつかず、結局のところ、前に他動詞があるということが確認できてはじめて目的語名詞句と確定できる。従って、目的語名詞句は目印としては効果は限定的である。

ハワイ語は多義語が多い言語である。多くの動詞は、その状態や行為に関連する名詞としての意味を持っている。例えば、行為動詞 *noho*「座る」の本来の名詞としての意味は「座ること、着席」であるが、「椅子」という名詞の意味も持っている。それが原因で、場合によっては、名詞句か動詞句か判断ができない、言い換えると、どちらでも意味的に矛盾しないという場合がある。例えば、状態動詞 *poepoe*「丸い」の本来の名詞としての意味は「丸さ」であるが、関連する意味として「球体」という名詞の意味でも用いられる¹³。

- (51) He poepoe ka honua.
NC-ID/AT round/sphere the earth
「地球は丸い/球体である。」 Elbert and Pukui (1979:157)

ここで、*poepoe* を状態動詞「丸い」の意味で考えれば、状態動詞文となり、名詞「球体」と考えれば名詞文（類包含文）である。それにより、後接語 *he* の機能についての分析も変わってくる。しかしながら、どちらでも事実であり、どちらとも判断が付かない、すなわち、どちらでも意味的に矛盾しない事例である。

尚、2.1.4節で述べたように、*he* と名詞の間に名詞句特有の接語である複数指標 *mau* (N が複数であることを示す) や指小詞 *wahi*「ちょっとした」等の後接語がある場合には、その句は専ら名詞句であり曖昧性は生じない。すなわち、[*he mau* N] [NP] (例(28)) や [*he wahi* N] [NP] (例(29)) という構造はあるが、[*he mau* V] [NP] や [*he wahi* V] [NP] のような構造はない。このことは、[*he* N] と [*he* V] の間には、意味の違い以外に、統語的な違いも存在することを示している。

3.3. 所有文（名詞述語文）に見えるが実際には動詞述語文の変種である事例

[*he* N][*kō/kā*-NP] という名詞述語文と外見上全く同一の構造をした [*he* V] [*kō/kā*-NP] という動詞述語文が用いられる場合がある。

同じ文献（様々な動物の描写を含む文献）の中に登場する二つの例文を比較する。

- (52) He pepeiaohao kō ka laehaokela,
NC-ID horn PO the rhinoceros
「サイは角を持っている。」 (lit. サイのは角だ) Mookini (1985:67)
- (53) He lō‘ihi ke ola ‘ana o ka elepani, he pōkole kō ke kanaka.
AT long the live NM of the elephant AT short PO the man
「象の寿命は長い、人間の（寿命）は短い。」
(lit. 象の生きることは長い、人間のは短い) Mookini (1985:5)

例(52)も例(53)の例の後半も外見上は全く同じに見えるが。例(52)は[*he* N][*kō/kā*-NP] という構造の名詞述語文（所有文）であるが、実は、例(53)は所有文ではない。例(53)は単に繰り返

しになる表現 *ola 'ana* 「生きること」＝「寿命」が省略された「人間の(寿命)は短い」という意味の状態動詞文 (*[he V][NP]*) と同様の意味・機能) である。このように、主語名詞句が *[kō/kā-NP]* という典型的な所有文の主語名詞句の形式をしていても、*he* が導く句が名詞句か動詞句かの決定的な決め手にはならず、曖昧なままであり、結局は文脈によって決まることになる。

4. 考察

4.1. 名詞句を導く *he* と動詞句を導く *he* の関係

名詞述語文のうち、類包含文(2.1.1.節)では「ある類に属する」ということを、所有文(2.1.2.節)では「ある類に属するものを所有する」ということをそれぞれ表していた。両方に共通して言えることは、いずれも、後接語 *he* が導く句は主語名詞句が指すものの属性を表していることである。動詞述語文(2.2.1.節、2.2.2.節、2.2.3.節)についても、主に主語名詞句が指すものの性質・特徴、或いは習慣・習性を表していることから、これも、主語名詞句が指すものの属性を表している、としてまとめることができる¹⁴。所有文で *he* の後ろに動詞が来る場合(2.2.4.節)について、状態動詞が来る場合には、やはり、性質・特徴を表しているが、行為動詞が来る場合には、経験や選択肢を表していた。このことから、行為動詞が *he* の後ろに来る所有文以外については、少なくとも意味的には *he* は属性を表す指標として働いているとしてまとめることができる。この点で、行為動詞を持つ所有文はやはりやや異質な存在と言える。

後接語 *he* は歴史的には元々不定冠詞であった(ポリネシア祖語の不定冠詞 **sa* の反映形¹⁵)とされており、また、文頭で述語となる以外に、文中で主語名詞句や目的語名詞句にもなることから、ハワイ語においても、後接語 *he* は、元々不定冠詞であったと考える方が自然である¹⁶。属性を表すという機能は元々の不定冠詞の用法から出たものと考えられる。あくまで仮説の域をでないが、[不定冠詞 名詞]により属性を表す用法が元々あり、その用法が類推により動詞にも広がったという可能性が考えられる。行為動詞の所有文は他と比べてかなり異質であるが、これもいくつかの類推、再分析等の結果ではないかと思われる。

4.2. 名詞句と動詞句の区別の曖昧性が示唆すること

名詞句か動詞句かの分析は一つのシステムとしてハワイ語の文法体系全体の中で後接語 *he* の機能を捉えるために必要なものである。*[he N]* と *[he V]* は外見上同じに見える形式であり、かつ、意味的にはいずれも属性を表すという共通点があった。一方で、統語的には、*he* に導かれるのが名詞句であるか動詞句であるか、すなわち、*[he N]* であるか *[he V]* であるかの区別は相変わらず必要である。統語的な区別が必要な理由としては、名詞句特有の後接語である複数指標と指小詞は *he* に導かれるのが名詞句の場合にのみ *he* と共起し動詞句の場合には共起しないこと(2.1.4.節)、目的語名詞句を取り得るのは *he* に導かれるのが動詞句の場合のみであること(例文(35)及び(36))、があげられる¹⁷。1.2.節で、その単語に付加される後接語の種類により、その単語が動詞的に用いられているか、名詞的に用いられているかその機能が示されると述べたが、*he* が導く句に関してはその例外となる、すなわち、後接語が *he* のみ

しか付加されていない、すなわち、他の後接語が付加されていない句については、その句が動詞句であるのか名詞句であるのかの文法的な手掛かりはなく、主語名詞句との意味的關係、後続する別の句との文法關係によってのみ、**he** が導く句が動詞句か名詞句かを判別することができると考えられる。もし、4.1.節で述べた様に、**he** は属性を表すという一つの意味機能を持つ後接語であると仮定したとしても、**he** の統語的な機能の分析としては、名詞句を導く機能と動詞句を導く機能という二つの機能を持つ二機能(bifunctional)的接語とみなすのが相応しいと思われる。

5. 結び

今回取り上げた、ハワイ語の **he** 以外にも、同じ形式の後接語が名詞句にも動詞句にも使われる事例がある。同じハワイ語では、後接語 **i** (名詞に付くと「~として/~になるように」、動詞に付くと「~するために」) が名詞句の冒頭と動詞句の冒頭の両方に現れる。また、ハワイ語の近親言語であるタヒチ語にはちょうどハワイ語の **he** と対応する後接語 **e** があり、その振る舞いも今回の **he** とかなり類似している¹⁸。このようなハワイ語の他の後接語、及び同形言語の後接語にも今回取り上げた問題と同じようなことが言える可能性があるが、それぞれ、とりまく事情は異なっているので、今後の課題としたい。

謝辞

* 本研究は日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C) 25370455「ポリネシア諸語における様々な小辞の機能・用法に見られる差異について」の一環である。匿名の 2 名の査読者からたいへん有益なコメントを得た。この場を借りて謝意を表したい。

注

- 1 名詞述語ではほとんどの場合、前置詞の機能を持つ後接語が名詞に付加されるため、分析の立場によっては、前置詞述語とみなすこともありえるが、本稿では、あくまで名詞が中核であり、前置詞要素は後接語として名詞に依存するものであるため、名詞述語と呼ぶ。
- 2 本稿で用いる略語は以下のとおりである。AC: 対格、AT: 属性、CM: 命令、ID: 不定冠詞、N: 名詞(前置詞/限定詞が付いていないもの)、N(<Vs): 状態動詞が名詞的に用いられているもの、N(<Vt/Vi): 他動詞または自動詞が名詞的に用いられているもの、NC: 中立格(neutral case)、NM: 名詞化(動名詞の指標)、NP: 名詞句(前置詞又は限定詞またはその両方が付いたもの)、PA: 受動態、PC: 指小詞、PF: 完了、PL: 複数、PO: 所有、PR: 固有名詞、QU: 疑問、Vs: 状態動詞、Vi: 行為動詞(自動詞)、Vt: 行為動詞(他動詞)。尚、**he** については、本稿での分析を明示するまでグロスは?で表示する。角括弧[] は句境界を示す。
- 3 ハワイ語の句構造について Elbert and Pukui (1979:41)は±preposed elements + nuclear elements(後置される修飾語要素も含む) ± postposed elements のように記述している。本稿ではそれに若干修正を施し、preposed / postposed elements という曖昧な言葉の代わりに後接語(proclitic)と前接語(enclitic)という術語を用い、nuclear element を中核となる名詞/動詞とそれに後置される修飾語とに分割した。

- 4 一般に、時制・相指標と呼ばれているが、実際には命令法の指標も同じグループに含まれるので、厳密には、時制・相・法の指標を含むグループである。尚、本稿で「指標」(marker)と呼ぶものは接辞ではなく接語に属すると考える。短い一音節からなる指標（例えば、例(6)の命令法を表す *e* 等）については、アクセントを持ち得ない等、音韻論の独立性が低く、それを単体としてみた場合には、接語とみなすべき積極的な根拠はない。しかしながら、それと句構造上同じ位置に現れる、すなわち paradigmatic な関係にあるものに、二音節又は長い一音節の時制・相指標（例えば、例(4)の完了相の *ua*、或いは否定の命令法の *mai* 等）が含まれ、それらはアクセントを持ち得るなど音韻論的な独立性が高く、より接語的である。このように、より接語的なものと同じグループに属するという点で、短い一音節のものも二音節又は長い一音節のものと一緒に接語として扱うのが適切と考える。
- 5 例えば、サモア語の不定冠詞 *se* がハワイ語の *he* と同系であるが、近年の記述である Mosel and Hovdhaugen (1992:149)でも、サモア語の不定冠詞 *se* は他の冠詞と同様の振る舞いをするのが指摘されており、現在でも不定冠詞としての分析に異論は出されていない。
- 6 Cook (1999:58)も従来の不定冠詞としての分析を支持する一方で、一つの可能性として、不定冠詞の *he* とは別物として、習慣相を表す時制・相マーカー(tense aspect marker)としての *he* を想定する可能性について示唆しているが、可能性の提示にとどまり、それ以上論を進めていない。
- 7 述語名詞句、固有名詞の前、同格名詞句、トピック名詞句など、特定の格を持たない名詞句に付加される前置詞という意味で、*neutral case marker* と呼んでいる。
- 8 このうち前置詞と冠詞の機能が統合された不定冠詞としての *he* の分析については塩谷 (1996)参照。また、塩谷 (2000)では、もう一つの可能性として、今回議論している二つの *he* の機能を両方とも属性を表す時制・相指標としてまとめることはできないか、すなわち、*he* が導く句は全て動詞句として（名詞句ではなく）分析できるのではないかという可能性に言及しているが、それ以上論を進めていない。
- 9 *lawa nō ko‘u lei, lawa ‘ole nō kou.*
enough indeed my lei enough not indeed your
「...私のレイは完成だ、あなたのは完成ではない。」 Fornander (1918-1919:707)
上記の例で、前半では *ko‘u lei*「私のレイ」のように[所有形+名詞]という形をとっているが、後半では *kou*「あなたの」という所有形だけで主語名詞句を形成している。
- 10 第1節でのべたように、ハワイ語の基本語順は<述語-主語-その他>であるが、この *loa‘a* は例外的な状態動詞であり、しばしば、<述語-その他-主語>という語順で用いられる。
- 11 通常であれば、目的語名詞句には後接語（前置詞）*i* が付加されるが、*he* の前にはそれは付加されない。*he* と前置詞が共起しない理由として、本稿では塩谷 (1996)及び Shionoya (2009)の分析を採用し、*he* には既に前置詞の機能と冠詞の機能が統合されているため、他の前置詞とは共起できないと考える。
- 12 Shionoya (2009)及び塩谷(1996)の分析では後接語 *he* には前置詞と冠詞の機能が統合されている。従って、他の前置詞や冠詞と共起しないのは当然と考えられる。
- 13 査読者から、名詞[+N,-V] < 状態動詞[+N,+V] < 行為動詞[-N,+V]のような名詞らしさの連続体でとらえられるのではないかと、更に、「座る」という動詞的意味の他に「椅子」という名詞的意味でも用いられる *noho* については[(+)/-N,+V]のような特性を持つと分析できるのではないかと指摘があった。確かに、状態動詞は行為動詞に比べて名詞という範疇と親和性が高いように思われる。*noho* については、

「座る」という行為を表す動詞としての意味から、「椅子」という名詞としての意味は必ずしも予測可能なものとは言えないことから、名詞 *noho* 「椅子」を動詞 *noho* と同じ語彙項目として扱って良いかどうかには疑問が残るかもしれない。

14 このような理由から、Shionoya (2009)では、動詞述語文の *he* を属性を表す時制・相指標と分析しており、本稿でもそれを採用して、例文のグロスでも既にそれを反映して AT（属性）と表示している。

15 Clark (1976:50)を参照。

16 *he* が定冠詞などの他の限定詞と異なる点として、前置詞と共起しないという点がある。実は、一部の慣用句に限られるが、*he* が様態を表す前置詞 *me* と共起する場合がある。*me he N la* という慣用句で「あたかも N のように」という意味を表す。例えば、N の部分に *manu* 「鳥」を入れると *me he manu la* 「あたかも鳥の様に」となる。これは、*he* がかつては純粋な不定冠詞であったことの痕跡と考えられる。

17 岩崎(2016)は名詞句動詞句以外に、もう一つのタイプの句として動名詞指標 *'ana* が付加された *'ana* 句について述べている。今回の議論には *'ana* 句は含めなかったが、英語の動名詞同様、名詞句と動詞句の性質を併せ持っている。

18 タヒチ語の *e* については Lazard and Peltzer (2000:20)参照。

参考文献

- Beckwith, Martha. (1997) *Ka Mo'olelo O Lā 'ieikawai*. Honolulu: First People's Productions.
- Beckwith, Martha. (2007) *Kepelno's traditions of Hawaii*. Honolulu: Bishop Museum Press.
- Carter, Gregory L. (1996) *The Hawaiian copular verbs he, 'o, and i as used in the publications of native writers of Hawaiian: A study of Hawaiian language and literature*. Ph.D. dissertation, University of Hawai'i at Mānoa.
- Clark, Ross. (1976) *Aspects of Proto-Polynesian Syntax*. Te Reo monograph. Auckland: Linguistic Society of New Zealand.
- Cook, Kenneth W. (1999) Hawaiian *he*, *'o*, and *i*: copular verbs, prepositions, or determiners? *Oceanic Linguistics* vol. 38 no.1, 43-65.
- Elbert, Samuel H. and Mary K. Pukui. (1979) *Hawaiian grammar*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Fornander, Abraham. (1916–1917) *Fornander collection of Hawaiian antiquities and folk-lore*. Vol. 4. Honolulu: Bishop Museum Press.
- Fornander, Abraham. (1918–1919) *Fornander collection of Hawaiian antiquities and folk-lore*. Vol. 5. Honolulu: Bishop Museum Press.
- Fornander, Abraham. (1919–1920) *Fornander collection of Hawaiian antiquities and folk-lore*. Vol. 6. Honolulu: Bishop Museum Press.
- 岩崎加奈絵. (2016) 「ハワイ語における機能語同士の共起に関する調査」、『東京大学言語学論集』、第 37 号、105-116.
- Kamanā, Kauanoe and William H. Wilson. (1977) *Nā kai 'ewalu : beginning Hawaiian lessons*. Honolulu: Publisher not identified.
- Kamehameha III. (1994) *Hawaiian Laws 1841-1842*, reprinted version. Green Valley, Nevada: Ted Adameck.
- Lazard, Gilbert and Louise Peltzer. (2000) *Structure de la langue tahitienne*. Paris: Peeters.

Malo, Davida. (1987) *Ka Mo'olelo Hawaii*. Honolulu: The Folk Pres.

Mookini, (1985). *O na Holoholona wawae eha o Ka Lama Hawaii*. Honolulu: Bamboo Ridge Press.

Mosel, Ulrike and Even Hovdhaugen. (1992) *Samoan reference grammar*. Oslo: Scandinavian University Press.

Nakuina, Moses K. (1991). *Pakaa ame KuaPakaa*. Honolulu: Kalamakū Press.

Schütz Albert J., Gary N. Kanada and Kenneth W. Cook. (2005) *Pocket Hawaiian grammar*. Waipahu: Island Heritage Publishing.

塩谷亨. (1996) 「ハワイ語の he の統語的性質」、『日本言語学会第 113 回大会予稿集』、253-258.

塩谷亨. (2000) 「動詞類と名詞類の区別の普遍性について-ハワイ語における品詞分類への適用-」、『室蘭工業大学紀要』、第 50 号、141-148.

Shionoya, Toru. (2009) Hawaiian *he* as a prenominal / preverbal particle. *Language and Linguistics in Oceania* vol.1, 1-12.

ハワイ語新聞 Ka Nupepa Kuokoa, Honolulu.

執筆者紹介

氏名：塩谷亨

所属：室蘭工業大学ひと文化系領域

Email：shionoya@mmm.muroran-it.ac.jp